

卒業論文 要旨

題目 デカルト研究：心身問題をもとにした人間の在り方について

学籍番号 17h1091

名前 藤嶋健一郎

小稿を書く動機は、大学の講義で触れた心身問題にあった。私自身、「人間の心はどこにあるのか」、この問いを吟味していたこともあり、強い関心を抱いた問題である。こうしたなか、心身二元論を提示し、人間の精神と身体それぞれの本質を明快に論じたデカルトという哲学者の存在を知る。彼は、形而上学としての心身二元論を前提としたうえで人間が心身複合体として存在する仕方を考察していたが、こうした考察を手がかりに人間の存在意味を卒業論文で明らかにしたいと考えた。

まず第1章では、主に『方法序説』と『省察』をとりあげ、「方法的懐疑」により「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する」ことを証明するプロセスを確認した。このプロセスで中心的役割を果たす方法的懐疑は、デカルトの代表的思考法である。つまり、あらゆる事象に対し、少しでも疑いのあるものは偽とみなし排除することにより、残ったものを真なるものとして確立する思考法であった。偽とみなされるものとして、外界から感覚器官を通して与えられる情報があげられるが、それは、われわれが人やモノなどの対象物を眺めるとき、強大な「悪霊」によって幻影を見せられている危険性が絶対には言い切れないからである。しかし、どんなに強大な悪霊が私自身を欺こうとしても、私が疑うことを遂行するあいだだけは、いかなる介入も許さず、私自身のそういう存在を確信できる。人間的精神の本質は考えること＝疑うことにあるわけだ。こうして「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する」という命題が証明される。

とはいえ、想像する能力、感覚する能力は「わたし」の「志向作用」の下位に属しているため、デカルトが偽とみなしていたことのなかでも、そのわたしが想像する私、感覚する私であるケースも認めている。この点にかんする考察を補う例として「蜜蠟の分析」が挙げられていた。時間経過とともに形状が変化する物体を蜜蠟として認識可能であるのも、それが視覚による感覚的なものだからではなく、精神の働きによるものだからである。このように或る物体を蜜蠟と規定するさいには、規定する主体側も存在していなければならない。このことから、わたし自身の存在が証明されうるともデカルトは論じる。

デカルトがわたし自身の存在にかんする確実知を得られたのは、懐疑を敢行し、疑う主体そのものへと自身の視点を反転させることができたからなのである。

つづいて第2章では、心身それぞれの本質を析出する観点から心身のレ斯的区別を考察しつつ、とはいえデカルトが日常的現実生きる人間の在り方を吟味するさい、精神が優位にある心身二元論の形而上学的観点をとらない点を強調した。デカルトにとって人間は、心身がレ斯的に結合する心身複合体であった。最終的にこうした心身結合を論じるため、その前提として身体と精神それぞれに固有の本性を形而上学的に画定しておく必要があっ

たわけである。

身体に固有の本性を考察することは、デカルトにとって物的事物の本性を考察することと同じだが、結論として、物的事物は延長という固有の本性を持ち、純粋数学の対象であるかぎりでは存在しうると述べられている。このとき三角形と千角形の例があげられるが、こうした数学的对象の認識は、その概念を理解する知性に加え、想像する能力を必要とする。一方で知性は、自身に内在する観念によって認識されることから、精神の本質に属している。他方、想像する能力は、精神が物体の側から理解され、感覚によって知覚された観念から生じているが、想像の成立にはこのように物体の存在が必要だとみなされ、これ以上は都合よく想像を説明する仕方がないがゆえに物的事物は現実存在しうると結論づけられた。

しかしながら、この結論にあつて物的事物の現実存在は、あくまで蓋然的に推測されるものだと言ひ直す必要があるとも述べられている。というのも、想像力で見出された観念からは、物的事物の現実存在を完全に認めさせる論証は得られなかったからである。

また、延長という身体に固有の本性に関して次のように述べられてもいた。すなわち、延長という物質的本質の分析を通じてさまざまな形を確認できるが、そうした形を産み出し、また場所を変えていくという能動的能力は、人間のような知性的実体ではなく、やはり人間以外の延長実体に属している。というのも、能動的能力は人間の知性作用を必要とせず、また精神作用の一つである意志が反映されずとも、形の産出や移動は可能だったからである。

以上の考察をふまえて、『情念論』では、心身二元論の形而上学とは異なった角度から身体に固有の本性が指摘されていく。

ここで注目すべきは、身体には心臓を起点とした血液循環とともに、「動物精気」と呼ばれる筋肉を動かす微小な物体も神経を通して流れているという主張である。この主張にもとづいてデカルトは身体を自動機械とみなしたことは興味深い。たとえば友人から叩かれそうになったさいに瞼を閉じることは、友人を警戒していないわたしの意志に反している。そのため、瞼を閉じた原因は、わたしの精神ではなく、ただ瞼を閉じる筋肉へと動物精気が流れていることに見出される。また、歩行や呼吸などは意志の関与なく行われる行動であり、心臓の熱で刺激された動物精気が各器官を流動することによって生じる自然の行動であるとされた。

デカルトが考察するに、こうした仕方で身体は自動機械的役割を担うわけである。ただし、身体に自動機械的役割は習性によって獲得されたもので構成されている点が強調されていた。

また『情念論』では精神が精神の能動と精神の受動という二つに大別される。一方で精神の能動は、精神のみに依存するとされた意志が代表としてあげられる。この意志はさらに、まず抽象的对象あるいは形而上的对象を思考するさいに精神の内部で終結するものと、次に散歩する意志とともに歩行する身体において終結するもの、この二種類に区別される。

他方、精神の受動は知覚や認識が代表としてあげられるものであり、精神の能動と同様に精神を原因とするものと、身体を原因とするものの二種類に区別される。精神を原因とするものは、キマイラなどの存在しない事象を想像するケースや、精神そのもののように可知的ではあるが想像不可能であるものを思考する知覚があげられている。身体を原因とするものは、神経を介するか否かで二つに区別される。神経を介さないものとして夢の中の幻を例としていたが、精神が原因の知覚ほどは明確でないため、精神が原因の知覚の影や映像とみなされていた。神経を介するものは、外部感覚と内部感覚、情念の三つである。特に前二者については本論文第2章でも考察したとおりだが、外部感覚は、精神が松明の光や鐘の音のような外部にあるものを対象に感覚するものであり、内部感覚は、自らの身体に感じる痛みや熱さに加え、飢えや渇きなどの自然的欲求を対象に感覚するものであった。ただこの二つの感覚は、時として自身を欺く危険性があると指摘されている。つまり、遠くから丸く見える塔でも近くで見れば四角い塔であるという外部感覚の誤りや、片足のない人が、その部分に関わる神経において、無いはずの足の部分に痛みを感じてしまう幻肢痛のような内部感覚の誤りがその例である。

デカルトは『情念論』においても精神と身体それぞれに固有の本性を考察したのち、両者を区別するメルクマールとして、身体の分割可能性と精神の分割不可能性をあげる。つまり、意志や感覚、知性などの能力は同一の精神から生じているため、個人は一にして全なるものと規定することができるが、分割することのできない物體的物事をその精神で思考することはできないため、身体は分割可能だとみなす。

第3章では、デカルトがもっとも語りたかった問題、つまり、心身複合体としての人間の在り方を論じた。まず、デカルトは人間とその他の動物を比較したとしても、そのなかから理性的魂を持つ人間を判別可能だと考えており、その方法を二点あげている。一つは、自身の思考を表現する際に言葉や記号を組み合わせて使用できるか否か判断する方法であり、また一つは行動の動機が各人の認識によるものか、諸器官の配置によるものかで判断する方法である。こうした判断基準にもとづき、理性的魂が身体と緊密に結合している状態こそ、真の人間を形成すると考えられた。

本論文で特に注目したことだが、デカルトは心身複合体である人間だからこそ生じる情念を次のように論じている。つまり、情念とは、怒りや悲しみのようにその原因が知られていないが、人間の最も根底に潜みつつ、身体に準備されたことを精神に意志するよう促す働きのことである。とはいえ、各人が抱く情念が多様で異なるのは、人間の脳が一様でないという点や、体質、精神、かつての習慣が異なることが原因であるとされる。デカルトは多様な情念を驚きや愛、憎しみなど六つの基本情念を軸とし、他の情念は、これら基本情念の複合で見出されるものとしている。そして、第一の基本情念と定義した驚きから派生し、意志の自由な決定への驚きである高邁の精神をそなえた人物が、善き人間の姿であった。デカルト道徳の要である。

ここで強調すべきは、心身結合が十全に確認されるのは日常の生活を送る場であり、哲

学的思考と無縁に生きる人は心身結合によって行動できることを疑わない、そうデカルトが述べていたことである。

また、心身複合体を考察する効用として、自身の陥りがちな誤謬を自覚し、矯正あるいは回避できるとデカルトは考えていたが、人間は、限られた時間のなかで行為の必然性を吟味する必要があるため、その場ごとの情念に引きずられて行動してしまう弱い精神を自覚する必要があった。こうした弱い精神を自覚しながら自身の精神を訓練し、工夫を重ね、情念を自身が制御できるようになることで、万人はいつそう善く生きることが可能になる。デカルトの道徳学にして人間学である。